第９課　最も説得力のある証拠

【暗唱聖句】

「これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである」ヨハネ11：51

【今週のテーマ】

【日曜日・イエスの十字架の下で】

教会の一致は神様からの他の霊的祝福と同様に、神様からの賜物によって導かれるものであり、私たちの努力や善行、心構えなど人間が生み出すものではありません。それはイエス様の死と復活を通して生み出されるものです。わたしたちが悔い改めてバプテスマによる罪の赦しを受け、イエス様を信じる同じ信仰を持ち、三天使の使命を世に広めるとき、わたしたちはイエス様と一体となり、互いに一致していきます。イエス様が私たちを一つにしてくれるのです。

「これはカイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるために死ぬ、と言ったのである」（ヨハ11，51，52）。

その年の大祭司であったカイファイアは図らずも預言して、イエス様の死の意味について語ったのは、それは神の子たちを一つに集めるためだったということでした。つまりイエス様が十字架で死がわたしたちを一つにすると語ったのでした。

「こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。」エフェソ1:10

イエス様の十字架がわたしたちを一つにするわけですが、私たちもイエス様を信じ、バプテスマを受けることで一つに結びあわされていきます。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」（ガラ3:26，27）

信仰を持ちバプテスマを受けることでイエス・キリストに結ばれ、キリストを着ると書かれています。信仰者がみなキリストに結ばれることによって一つになれるわけです。団体が同じユニフォームを着るように、信仰者は同じキリストを着ることで、第三者が見ても一つの群れであることがわかります。

【月曜日・和解の働き】

世界には個人レベルから国家レベルまで様々な対立があります。霊的な世界にまで目を上げれば、宇宙レベルでの対立があるわけですからこれは当然のことであり、だからこそ一致や平和は神様の重要な御心なのです。

「しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」エフェソ2:13～16

この聖句はイエス様がご自分の命をもって二つの敵対していたもの、つまりユダヤ人と異邦人を一つにしたことが書かれています。人種や民族、文化的隔てを一つにするために、イエス様の命が捧げられたのです。そのことが強調されていることは重要です。神様との和解が敵意を持ったまま個々に実現することはできません。両者の間にあった敵意を滅ぼされ、1つの体となることで神様との和解が初めて実現するのです。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」第二コリント5:17～21

イエス様と結ばれて新しい者とされた私たちは神様と和解しています。そして神様はこの世も神様と和解できるように、私たちに和解の言葉をゆだねられており、こうして神様の和解は広がっていきます。

【火曜日・実際的な一致】

「キリストが地上の生涯であられた姿は、すべてのクリスチャンがなるべき姿である。彼は汚れなき純粋さにおいてだけでなく、忍耐、寛容、快活といった性質においても、私たちの模範なのである」エレン・Ｇ・ホワイト

聖書は「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」（エフェソ4:24）と、わたしたちがイエス様の模範に従うように教えています。では正しく清い生活とはどのような生活でしょうか。

「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい」エフェソ4：25～5：2

1偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語ること。

2怒ることがあっても、日が暮れるまで怒ったままでいないこと。

＊怒ることそのものが罪ではありません。ただ怒りの感情をいつまでも持ち続けると、それは罪となります。罪の本質的な意味は神様から離れることです。怒りの感情を持ち続けると、悪魔にすきを与えてしまい、神様からどんどんと遠く離れてしまいます。だから、怒ることがあったとしても、その感情をその日のうちに沈め許し、解決することが重要なのです。

３盗んではいけません。

＊労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与える生き方が奨励されている。

４悪い言葉を一切口にしてはなりません。

＊聞く人に恵みが与えられ、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語ること。

５神の聖霊を悲しませてはいけません。

＊聖霊は救いの保証

６一切の悪意を捨て、互いに親切にし、憐れみの心をもって赦し合うこと。

クリスチャンの品性が周りの人たちに与える影響を過小評価してはなりません。わたしたちの生き方がキリストのご品性を反映するものとして一致しているとき、力強い証となっていくでしょう。

【水曜日・多様性の中の一致】

「信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。

特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです」ローマ14：1～6

パウロはローマの教会に分裂をもたらす問題に対して語っています。パウロの主張は考え方が違うことへの批判を止め、教会を分裂させないように勧めることでした。ここで取り上げられている論争点は、食べ物や特定の日に関することがらでしたが、最初にパウロが協調しているのは、「信仰の弱い人を受け入れ、その考えを批判してはならない」ということでした。信仰の弱さが食べ物や特定の日を重んじるという行為に現れることがしばしばあり、信仰の強い人がそれを裁くことがあったようです。しかし神様はこのような信仰の弱い人も受け入れてくださっているのです。

食べ物の問題というのは、レビ記に出てくる食べ物のことではなく（これは問題になっていない）、偶像に捧げられた肉についてであり、当時偶像に捧げられた肉が市場に出回っていたので、それを食べると偶像礼拝をしているのと同じになってしまうのではないかと恐れて口にしない人たちがいたのです。また特定の日とは安息日のことではなく（安息日は問題になっていない）、ユダヤの祝日や断食の日などを指しており、クリスチャンになった後も、これらの日を誠実に守っている人たちがいました。信仰によって自由とされたと確信している人たちは、いまなお食べ物や特定の日に影響されている人たちの信仰を裁いてしまうことがあったようです。しかし、福音の本質からそれていない限り問題とせず、それぞれの信仰のあり方や多様性を認めていくようにパウロは教えています。

【木曜日・使命における一致】

「また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった」ルカ22：24

「彼らは皆婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」使徒1：14

「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると」使徒2：1

「そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし」使徒2：46

イエス様が十字架にかかろうとしておられたそのとき、弟子たちの心の中にあったものは、誰が一番偉いのだろうかという思いでした。しかし、イエス様の死によって彼らの考えはいやおうなく変えられていきました。彼らは霊的な不足を感じ、救霊の働きができるように一つになって集まり、心を一つにして祈り、真心をもって互いに交わるようになっていったのでした。これが聖霊を受け取るための良き準備となっていきました。また、彼らはイエス様が自分の弱さや欠点を赦していてくださることを知っており、それが前進する勇気となっていきました。そして、「信徒の望みはキリストのご品性に似たものとなることであり、神の国を発展させるために働くことであり」（患難から栄光へ上P44 ）、同じ望み、同じ使命が彼らを一致させていきました。